

## コロナ禍における大学山岳部の活動 ―現状と課題―

中 澤 暢 美（明治大学体育会山岳部監督）

昨年年初より感染拡大し今も尚、社会生活や経済活動に大きなダメージを与え続けている新型コロナ感染ウイルス。従来当たり前のように山に行けた環境下から、突然誰も予測していない状況下に置かれ、感染回避という生命の安心・安全を大前提とした山行を執り行うことが当たり前となった現在、改めて感染拡大の初期段階から活動再開、そして現在に至るまでの取組み経緯を振り返り、停滞させることなくより持続性を考慮した大学山岳部の活動を取り進めるポイントと課題を整理してみたい。

今年2月初め、横浜港に寄港したダイヤモンドプリンセス号船内で新型コロナが爆発的に感染し、その後感染経緯不明ながらも日本国内に瞬く間に広がり、予め7都府県に対してなされていた、緊急事態宣言も間もなく4月16日には全国47都道府県に拡大し、5月6日まで全般的な社会活動自粛の対応を余儀なくされてしまった。

明治大学においては2月下旬以降、「新型コロナウイルス感染症への対応について」にて全学生・職員に対して感染防止の注意喚起に関する継続告知を実施。

感染状況の悪化に伴い、入学式の中止、授業開始の延期、大学施設の使用中止等、大学諸行事の取止め・順延が告知され、体育会においても4月7日に緊急事態宣言期間の活動禁止が告知された。

明治大学ではコロナ感染状況をリスク管理としてレベル化（0～5）し、レベル1に軽減されるまで体育会所属クラブの活動を原則自粛することとした。

※明治大学では緊急事態宣言時はレベル4に相当す

ると判断し指示対応

〈明治大学での課外活動におけるレベル基準〉

レベル0：通常通り

レベル1：感染拡大防止に留意して活動を認める

レベル2：原則活動禁止。大学が許可した一部活動のみ可

レベル3～5：全面活動禁止※後日、レベル3についてレベル2と同等レベルとなる。

従来、山岳部（以下、MAC）は例年3月に最長2週間程春山合宿を行っていたが、上述の大学からの自粛要請に伴い、長期の山行が実施できなくなったこともあり、谷川、八ヶ岳と分散した山行を3月中旬に実施するにとどまった。また4月7日の活動中止告知に従い、正式に活動自粛が始まった。

お茶の水にある部室への入室禁止となり自粛期間中はオンラインミーティングを部員学生間で開催。2か月の間、学生は自宅近くでソーシャルディスタンスに留意した個人トレーニング（ランニング・筋トレ）と山岳関連図書の読書を義務化しミーティング時に活動の共有を実施。併せて上級生とコーチングスタッフにてオンラインによる学生の状況等を共有するという機会を週一にて開催した。

前後するが新入部員勧誘については主にSNSで実施し、入部者に対して上述のオンラインミーティングにて部員間の意思疎通を実施した。

5月22日に大学は5月25日より緊急事態宣言解除がされることを受けてレベル4から3への緩和を体

## 2-1. 登山界の現状と課題 特集-登山と新型コロナウイルス-

＜夏季合宿実施申請書類＞

6. 山岳部夏季山行トレーニング（合宿）開催願書
7. コロナ禍での緊急連絡網

※参考資料として上述1. 2. 3. 4を添付

従来決算合宿を冬山（12月下旬～1月上旬）に実施していたが、2020年度は緊急事態と認識するとともに部員の山岳活動における総合的な体力・技術等の積重ねに時間が足りない等を考慮し、春山（2021年3月上旬～中旬）を決算と定め、年間活動を修正するとともに段階的なレベルアップ（無理をして急がない）を図ることとした。

また安全に決算合宿を完遂するために必要なカリキュラムについて上述の「山岳部活動カリキュラム」に活動空白期間（4月～7月）に実施すべき項目を再開以降のスケジュール内で無理なく補足・挽回できるよう内容・実施時期を明確化するとともに関係者（部員・コーチ陣）にて合意・共有して取り進めた。

まずは久しく山から離れていたことから部員（1～2年生）の山行の感触を思い出す・慣れることを目的として7月中旬承認後、近隣山域での日帰り山行から再開。目的別山行を計画的に実施し無雪期山行として一番の成果（体力養成（重量負荷耐性））を目論む夏山合宿（最長2週間の山行）へと繋げた。

＜実施山行＞

- ・日帰り山行 7月17日（場所：丹沢 ヤビツ峠→塔ノ岳→大倉、メンバー：学生、中澤、目的：山に慣れる）
- ・日帰り山行 8月2日（場所：丹沢 鍋割山→塔ノ岳→大倉、メンバー：同上、目的：（夏山に向けて）重荷を経験する）
- ・日帰り山行 8月6日（場所：丹沢 宮ヶ瀬→丹沢山→塔ノ岳→大倉、メンバー同上、目的：（夏山に

育会各部へ告知し、6月に入り感染者拡大が落ち着いてきたのを見計らい、社会的距離の確保や3密回避等の予防策を実施したうえで限定的に活動再開を検討開始した。（レベル3から2への緩和検討）

6月17日、大学より7月1日からレベル2への緩和に伴い、「感染拡大防止の取組みや安全安心の対策が十分実施できると認められた」部に限り限定的に活動の再開を認めると告知※。この告知に基づきMACとして活動再開に向けた具体的な準備を開始。速やかな活動再開に向け、6月19日に監督（中澤）が大学窓口である学生部スポーツ振興事務室長と面談し、再開に向けた申請に関する留意点をヒヤリング。以下の申請に必要な書類作成を関係コーチと連携して作成。

※上記告知時に大学より「新型コロナ感染症への対応について」、「体育会各部活動再開ガイドライン」が示された。

＜申請書類＞

1. 願書（活動再開）
2. 山岳部ガイドライン
3. 山岳部活動カリキュラム
4. 山岳部段階的練習計画表
5. 山岳部活動再開挨拶分（保護者宛）※ 承諾書を返送することを条件に部員の活動をMACとして承認

6月下旬より幾度となく大学に申請したものの、承認に不足する内容・箇所が指摘され、加筆・修正したのち7月17日に正式に部分的な活動再開を承認される。

前後して7月9日大学より「夏季休暇時の合宿実施に向けた申請方法」について伝達があり、7月20日以下申請書類を提出し、22日に受理される。

向けて) 機動力・行動距離を経験する)

- ・夏山合宿 8月17日～26日(場所:室堂→薬師岳→黒部五郎岳→三俣蓮華岳→水晶岳→雲ノ平(定着)⇔野口五郎岳→折立、メンバー:学生、中澤、高柳コーチ、目的:体力養成、幕営生活技術養成、下級生指導、山城経験他)

体力養成をやや足早に上記山行にて実施するとともに、決算山行実施に欠かせないロープワークの養成のため以下山行を以下のとおり段階的に実施した。

<実施山行>

- ・日帰山行 9月10日(場所:日和田山、メンバー:学生、天野コーチ、宮津コーチ、目的:ロープワークの養成)
- ・岩登山行 9月16日～17日(場所:三ツ峠、メンバー:同上、目的:マルチピッチでのロープワーク養成)
- ・岩登山行 9月26日～28日(場所:八ヶ岳、メンバー:学生、中澤、小久保コーチ、宮津コーチ、目的:バリエーションルートでのマルチピッチによるロープワーク養成)

併せて、決算合宿実施に向けて必要と思われる以下の山行を実施した。

<実施山行>

- ・春山偵察山行 10月17日～19日(場所:双子尾根→杓子岳→白馬岳、メンバー2年生学生、宮津コーチ、目的:決算合宿実施に向け山行ルートの事前調査)
  - ・奥秩父強化山行 10月31日～11月2日(場所:瑞牆山→金峰山→甲武信ヶ岳→西沢溪谷、目的:無雪期の体力養成、リーダーシップ養成他)
- 積雪期山行の準備経験の場所として従来、富士山

(御殿場ルート、11月下旬～12月上旬)にてトレーニング山行を実施してきたが近年の積雪不足から2020年度は以下のとおり谷川エリアに場所を移し山行を実施した。

併せ、決算合宿(春山)の事前トレーニング山行として冬山合宿を以下のとおり実施した。

<実施山行>

- ・積雪期トレーニング山行 12月8日～12日(場所:谷川岳周辺、メンバー:学生、中澤、宮津コーチ、目的:積雪期山行技術の習得(雪上歩行技術・ロープワーク技術、幕営生活技術)での経験蓄積・養成)
- ・冬山強化山行(12月25日～1月2日(場所:爺ヶ岳東尾根、メンバー:学生、中澤、宮津コーチ、目的:積雪期山行技術の養成(雪上歩行技術・ロープワーク技術、幕営生活技術)での経験蓄積・錬成)

以上、緊急事態宣言が解除された2020年5月末にはMACの今後の活動の先行きが大いに懸念されたものの、コロナ禍において相応以上の活動を実施することができ期待以上の成果を創出することができた。以下に実現に至った要素や欠かせないポイントを記載する。

## 1. 活動のスムーズな再開について

大学に所属している組織である以上、大学の指示に従うのは当然ではあるものの、当初申請時には当方の申請事由は不完全なものであり、(承認する)大学側の理解を得る内容と大きく乖離していた。しかしながら、幾度となく交渉時に大学より承認を得るためのアドバイスをいただき無事活動再開に漕ぎ着けることができた。再開に至った大きな要因としてまず、大学側の学生の課外活動再開に向けた親身な

理解と配慮があることが挙げられる。最近の学生に対してはより文武両道を求め、過去のような部活動だけに専念できるような環境下ではなくなっている。しかしながら大学側も学生の課外活動を支援することが大学においても総合的に価値向上につながると認識していることから、学生と大学とのいわば互惠関係が明治大学では醸成されていたことが大きな再開に向けた要素であった。

上述のような環境下ではあるものの、当然ながら承認に値する内容を申請しなければならないことから、以下に承認性を担保するために必要なポイントを記載したい。

**(1) なぜ、コロナ禍において感染リスクの高くなる集団かつ複数日の活動を再開しないとイケないのか。**

MACは早期活動再開の必要性について以下の5つの理由を活動再開願書に記載し、必要について論理的かつ具体的に明記した。

- ・ 山域を長期に亘り踏破するために必要な体力（荷重耐性力）の養成
- ・ オールシーズンに岩稜・岸壁等を登攀するために必要なロープワークスキルの習得
- ・ オールシーズンの山行を継続するための生活技術（テント設営・撤去、食事等）の習得
- ・ 厳しい自然環境の変化を予測判断するための気象知識ならびに山行中のけがや疾病予防に必要な知識の習得
- ・ 上述の活動を円滑に遂行するためのメンバーシップ・リーダーシップ・コミュニケーションの養成

上述の5つの要素は当然ながら即座に習得できる

ものではなく、山に至ってはシーズン毎の経験が不可欠である。加えて学年毎にレベル差や役割が異なり、4年間と限られた期間の中で確実にステップアップするためにも早期の活動再開は不可欠であることを解りやすい言葉に置き換えて明記した。

**(2) 早期に活動再開しないとイケない理由を定性・定量面で論理的かつ丁寧に説明する。**

例えば、MACは例年冬山を決算合宿と設定しているが、決算合宿を大学の承認を前提に無事完遂するためには必要な情報を明記し理解を得る必要がある。決算合宿の時期（12月下旬～1月上旬）、山行日数（最長約20日間）、体力面：耐性負荷重量（最低40kg）、技術面：ロープワーク習得（無雪期・積雪期）、知識面：気象・衛生・救助、その他：メンバーコミュニケーション・リーダーシップ等。このような山行での必要日数や負荷重量の必要性、そして遡ること決算合宿を円滑に執り行うための無雪期での活動内容の関連性等、要素やスキルさらには信頼関係を習得・醸成するためにも年間を通じて計画的な準備と実践が不可欠であることを明示しなければならない。

山行経験のない大学関係者（決裁権限者）に対して「我が山岳部は長年～」という精神論は通用しないことを念頭に記載する必要がある。

**(3) 指導者の主体的関与**

活動再開に際し大学より指導者からの申請願提出を求められた。このことから有事（感染者発生時）の際の責任の所在の明確化を求められたと理解する。また上述の申請書類（①～⑤）についてはコーチ陣にて作成した。いずれの書類においても大学の承認を得るために必要な書式・内容を準備することは学生においては負荷が大き過ぎる。また大学からの



活動再開における活動ルール遵守に対する信頼性の獲得等を考慮しても指導者が相応の関与は致し方ないことと考える。

よって以下の4項目において少なからず指導者が当面関与し取り進めることとした。

- ア. 山行時
- イ. 準備計画時
- ウ. (活動再開に向けた) 資料作成時
- エ. 大学折衝

山行時においては活動再開当初、健康管理面において必要があると認識し指導者として同行。それ以降(感染防止のための)ガイドライン遵守や安全面、技術面のサポートを目的としてほとんどの山行には指導者が同行している。

計画時においても活動再開申請にて作成した「山岳部活動カリキュラム」「山岳部段階的練習計画表」に基づき定例のコーチ会(上級生・コーチ陣)にてPDCAを確認しながら取り進めている。

活動再開に向けた資料作成において、特にMACの(コロナ感染防止のための)自主ガイドライン作成では的確な資料作成による実効性の担保に向けて、6月16日に大学が示した「体育会各部活動再開のガイドライン」ならびに5月25日に山岳4団体※から発出された「「自粛」要請解除後の登山・スポーツクライミング活動ガイドライン」の内容に準拠しかつ現実的な対応も熟慮したうえで作成した。

※山岳4団体

- ・公益社団法人 日本山岳・スポーツクライミング協会
- ・日本勤労者山岳連盟
- ・公益社団法人 日本山岳会
- ・公益社団法人 日本山岳ガイド協会

大学との折衝においては、活動再開以前より適時

大学窓口(スポーツ振興事務室)と接点を保ち、活動再開・継続に支障がきたさないよう留意した。

## 2. 再開後の活動の継続について

当然のことながら2021年1月現在、関係者から感染者を出していないことが挙げられる。感染防止のために日頃から、MAC自主ガイドライン遵守の徹底に加え、指導者からの継続した注意喚起と学生の承認確認が奏功していると考える。しかしながら昨今の感染拡大状況を勘案すると予断を許さない状況であることは明確であることから一層の関係者の危機意識を持った行動が求められると認識する。

加えて、2020年4月より部室(お茶の水)への入室が閉鎖されており学生の山行準備等の拠点確保のため仮部室を8月より借りることにより活動に支障がきたさないようコーチ陣にてサポートしている。こういった資金面において炉辺会(OB会)という支えの存在は大いに機能を発揮している。

## 3. 活動再開・継続に共通するポイント(2項目)

1つめとして「学生・コーチ間の信頼関係」である。学生の“MACのメンバーとして山に行きたい”という率直な意識とコーチ陣の“学生を山に行かせたい”という意識が合致し、目指すゴールに向けベクトルの合った協働の取組みが実現できていると思われる。上述のとおり山行同行や大学折衝等、コーチ陣が自分事として適材適所にてサポートする。それにより学生もコーチ陣のアドバイス・指示に素直に従う。好循環なコミュニケーションが成り立っていることにより有機的に実動していると認識する。

2つ目として学生ならびにコーチ陣の強い想いが挙げられる。学生は在籍するMACでの自己成長意識を有していること。コーチ陣は関与する組織(MAC)の持続的成長に対する強い想い(学生への期待)で

ある。精神論を論じるつもりはないがこういったコミュニケーションがあることで有事においても円滑な対応が機動的に遂行できるのではと考える。

### 4. 今後の解決すべき課題と対策方法

活動経緯と成果ばかり記述してきたが、当然ながら課題も散見されている。まず最重要課題として感染防止の維持継続である。特に山に行くまでの日常生活での防止維持取組が肝要である。山に入ればメンバーとの濃厚接触は互いの命を守る意味でも少なからず避けることはできない。より日頃の注意が安全な山登りを実践するうえで不可欠である。関係者の危機意識ある行動が必要であると前述にて述べたが、各自の主体性に任せるだけでは限界があり確実な防止には至らない。より具体的かつ可視化できる仕組みで取り組まなければならない。

次に学生部員のメンタル面のサポートが挙げられる。従来の学生生活が過ごせていない事や部員以外の同級生等とのダイレクトコミュニケーションが皆無であることから、あるべき学生間のコミュニケーションによる多面的な経験と成長が滞っている。

またコロナ禍でのコーチ陣による学生部員の活動サポート負荷も想定以上である。大学指示による山行同行や大学への申請書類作成等、今後持続的にサポートするうえでも特定関与者への負荷集中を回避できる仕組みを検討せざるを得ない。

今後コロナ禍が続く中、MACにおいても持続的かつ理想的な活動を継続するためには上述の課題を速やかに解決しなければならない。しかし大学山岳部というやや広範な括りでの組織規模で今回の対応状況を見てみると活動再開状況は千差万別かと推測される。自費するつもりは毛頭ないものの、大学の活動に対する理解、組織的対応力（コーチ陣のバツ

クアップ、金銭的サポート等）の面ではMACは恵まれており、このような対応が全ての山岳部にて可能とは想定できない。このような状況から大学山岳部が相対的に解決の糸口を探り当てるためには、コロナ禍でのスムーズかつ持続的な活動実現のための時代に応じた組織横断的なサポート体制の構築が急務と考える。

このサポート体制を編成することで、活動再開に必要な要素（感染回避対策・所属大学の承認を得るために必要な書類作成等）の共有が効率的に可能となると思われる。

この取組を早期実現するためにも、所轄官庁・関係団体の主体的関与は欠かせない。加えて山岳関連の出版会社やSNSサイトと協働取組を実施することにより、このような問題を早期に解決できる窓口として効果・効率的な機能を発揮できると考える。

各組織の既成取組の踏襲継続を否定はしないものの、今回直面している課題解決は中長期的に見ても、山を安全に楽しむ人材を増やすとともに指導者や山の魅力を伝える伝播者育成等、山岳愛好者拡大を支える人財育成の機会ロスを防ぐことにも密接に関わると思われる。直近の解決すべき事象を持続必要性を前提に見直すとともに優先順位化し、スクランブルかつ適材適所な人材による横断的なチーム編成にて対処することが不可欠と考える。